

## 電気と私の人生(二)

終戦で帰郷。昭和二十三年四月国立仙台無線電信講習所に入學するまで、生家で家業の農作業を手伝いながら、好きなラジオ、アンプ等組み立てて喜んでいた。青年団の演芸会が盛んな頃で、大出力のアンプを貸し出し、得意になっていた。

総て真空管式で、仙台に部品を買いに行くのも、白石の電気店でトランスを特注し、その場で巻いて貰って、帰るのも自転車で行った。今では考えられない行動で、好きな事は、体を厭わず、行動していた頃だ。

自分の一生の職業を考えなければならぬ。軍隊で習い憶えた無線通信術を生かし、通信士になろうと思ひ、願書を出す為、仙台、中江の無線電信講習所に行った。受験するのは、新制中学卒業の資格がある。私は小学校高等科二年卒、一年足りない。ガツカリしていると「何か勉強したことが無いですか」と聞かれたので、「田舎で青年学校に時々行っていたし、横須賀海軍工廠受信実験所に、三年間居た時、毎週一日青年学校に通っていました」と答えたら、「中学卒業と認めましょう」と受理してくれた。

三月に入つて、試験を受けたが、あまりにも競争率が高い。国立無線電信講習所は、仙台と、九州熊本にあるだけで、日本を二つに分けて受験者が殺到する。試験場も全国の主な都市で行われる。講習所は、学資は無料、その上手当が貰える。終戦後で暮らしが苦しい時代だったから、チャンスと思ひ受験者が殺到したのだろう。

競争率は二十五倍、又は三十五倍と聞き私は諦めた。その時仙台市では消防学校の受験生を募集していた。願書を出し、明日はその試験日と云う日、無線電信講習所の合格通知書が

届いた。

よくも合格したものだ。試験結果より、履歴書の方を重視したのかも知れない。合格通知書と一緒に入学する日まで、モールス信号を、和文・英文とも、全部暗記して来ることが、記載されていた。

入学し、校舎の隣にある寮に入ったが、すぐ原の町で魚屋を営んでいる叔父の家に下宿することになった。「魚安」の看板が上げてあった。九人の子供と私で十二人、大家族の中、一年間お世話になった。アルバイトに「村上音響工芸舎」の小さい看板を店の脇に掛けさせて貰い、少なかったが、ラジオ、アイロン等修理して、小遣いを稼いでいた。

九月の二学期から、仙台電波高等学校になり、授業料を払わなければならなくなった。私の科は第一別科、一年修業で、ほかに二年終業の第二別科、三年間の本科があった。

二十四年三月、国家試験を受け、第三級無線通信士の資格を得て、学校の紹介で岩手県宮古市鉾ヶ崎（磯崎魚業部）第二磯丸の小さい漁船に就職した。

お盆の最中、盲腸になり、宮古市立病院に入院、手術、船長の加倉さんに付き添って貰った。病院の隣宮古駅前広場では、每晚盆踊りで、病室までスピーカーの音や、人声が大きくなり、船長は「局長チョット見てくるからな」と言っていて、夜になると出掛けて行った。

約十日間で退院。二、三日休んで出漁した。通信士が乗り込まなければ出航できない規則だ。約十五人の船員は、お盆中休めて、いい骨休みだったろう。

あの人のいい船長に入院中付き添って貰ったことや、盆踊りの囃子が、懐かしく思い出される。